

シルクの使い道

江戸時代（1603～1867年）には、織物は、標準的な小袖（「小さい袖」を意味する）着物を作るのに要する生地量を基準に測られた。1枚の小袖を作るために要する量が1反（幅36センチ、長さ11.4mの一巻きの生地）とされていた。

1反の絹を作るには、精製された絹が650グラム必要であり、生糸は900グラム生産する必要がある。この量の生糸を作るには、4,900グラムの繭、すなわちおよそ2,600個の繭を必要とするのだ。1個の繭は、実のところ、長さ1,300～1,500mの一続きの絹を固く巻いて作られている。3～5本がまとめて糸巻きに巻かれ、一本の生糸が作られる。

今日では、絹はもちろん衣類を作るためにも使われるが、化粧品や三味線の弦の製造や、日本画（日本の絵画）の制作にも使用される。また、医学の分野（縫合や人工静脈などに使われる）においても重要な役割を果たしている。